

## 顧客からの信頼を維持し、 全社的な方向性を統一へ

5年前から新規採用を再開し、社員数が15人から30人に倍増した。顧客からの信頼を維持するため、新入社員のスキル向上を図るとともに、全社的な意識の方向性の統一に取り組んだ。

▼  
取り組み内容

**Step 1**  
現状把握

大竹社長や役員、社員から現状の課題と改善の要望をヒアリングし、現場レベルでの問題点を把握。

**Step 2**  
課題整理

Step1の情報を課題別に仕分けし、客観的な視点から解決策の糸口を探った。

**Step 3**  
戦略立案

Step2で洗い出した問題点をクリアできる人材育成法やコミュニケーションの円滑化のスキームを立案した。

**Step 4**  
組織の  
見直し

Step3のスキームについては、日常の業務に組み込むかたちで既に行っており、一定の効果が上がった。

受入企業

### 大竹電機株式会社

代表取締役社長 大竹 和彦 さん

1939年に白山市（旧松任市）で創業した電気工事会社。家電製品の販売・修理から電気設備工事まで幅広く扱い、近年は太陽光発電システムに注力する。現代社会において電気を必要としないものは少なく、業績は堅調に推移している。誠実と信用を第一に、建設現場でのスムーズな施工を目指し、日夜努力を重ねている。

研究員

### 神野 憲治 さん

東京都出身。建設・舗装業界で主に人事畑を歩み、給与・退職金制度、人事評価制度などの設計・変更を行った。その後、パチンコ周辺機器メーカーに転職し、パチンコ関連機器の受注から生産・物流までのルールの確立、販売システムの構築などを担当した。また、健康ランド・スーパー銭湯の事業立て直しや納骨堂の販売事業等にも携わった。

共創型企業・人材展開プログラム 事例

CASE

新入社員の増加に  
適応するための  
スキームづくり

取り組みの成果  
・  
今後の取り組み

- ・急増した若手社員の技術を早期にレベルアップするため、技術修得のためのスキーム表を作成することで、指導方針が明確となった。また、企業のブランド力強化に向け、技術力の重要性を共通認識とした。
- ・従来から在籍していた社員と若手社員の間にはジェネレーションギャップがあったが、的確な技術指導を実施することにより、上司と部下の関係性が良好になった。
- ・業務のDX化が喫緊の課題であり、自社の作業内容を見直し、社員をデジタル的な思考に転換していく。

企業の評価・今後の関わり方

参加理由

- ・事業の継続性を考え、新入社員を増やしたものの、技術レベルなどを一定に保つのに苦労していたのが参加の理由です。自分たちでは気づかない視点が、未来の成長エンジンを生み出す原動力となり、大竹ブランドのブラッシュアップにつながると考えました。

評価（成果・社内変化など）

- ・神野さんが考案したスキーム表の導入によって、社員は階段を上がるように成長を実感でき、長年の経験に裏付けられた取り組みにはとても満足しています。的確なアドバイスが得られることから、神野さんを頼る社員も増えているようです。
- ・さらに会社に馴染んでいただければ、見えてくる課題も変わってくると思います。これからは課題に対して応えるだけでなく、自ら積極的に提案してもらえらるものと期待していますし、まだまだアドバイスしていただければと思います。
- ・自分たちを客観視することは難しいため、とかく社内改革は難しいと言えます。本プログラムはその突破口となり得ます。

今後の関わり方

- ・どのような契約になるかは決まっていますが、引き続き神野さんには当社のアドバイザーとして残っていただきます。スキームはできましたが、改善が必要な部分もあると思います。運用面でサポートしていただきたいと考えています。

研究員の評価・今後の展望

参加理由

- ・55歳を目前にして、これまでのキャリアにない分野に挑戦したいと考えたのがきっかけです。転職と比較して、年齢の制限がなく、職種が限定されないため、間口の広い企画だと感じました。自分で行動できる人ならチャレンジする価値があり、人生をもう一度楽しめると感じました。

評価（取り組み・生活）

- ・過去に人事を担当した経験からスキーム表を作成しました。「会社への貢献度が高く、将来にわたって成長が見込める」人材には共通する特徴がありますので、会社に必要とされるスキルやコミュニケーション能力が計画的に身に付くようにしました。
- ・大学では、学生からさまざまなソフトウェアについて教わりました。そのようなツールを使いこなす中で、加速度的に進む現代社会では、効率的に時間を活用する術を身に付けておく必要性に気づかされました。また、大学の先生には、多様なベクトルを持つよう指導されました。
- ・本プログラムに参加した研究院8人は仲がよく、互いに連携しながら高めあえる存在でした。8人とのつながりは続けていきたいです。

今後の展望

- ・今後については大竹社長と話し合い、引き続き大竹電機で働きたいと思っています。これから先の世界は不透明さが増していくかもしれませんが、そのような時代でも、しっかりと石川の地に根を張って進めるよう、人材育成に取り組んでいきます。